マサイ族の部落

ゲームドライブの合間にマサイ族の部落を見学に行く。ケニアには 42 の民族が生活しているが、何と言っても代表的なのはマサイ族である。日本人の我々にはマサイの名が知れ渡っている。それ以外の民族名は聞いてもあまり耳にしたことがないものばかりだ。

野生動物の多いアフリカの大地で昔から定住しない移動牧畜生活をしている。
成人の男は高く飛べた人から花嫁を選ぶ権利を有する等の知識しかないが、この人達の暮らしぶりを実見できるのは興味深深である。

マサイ族はケニアでも変わった一族と思われている。農業をして、定住生活をしているキクユ族のダンカンはあまり良く思っていない。移動を繰り返している放浪者で教育もされていない。牛が唯一の財産で、牛肉と乳製品を摂るだけで、野菜類は殆ど食べないので食生活が貧弱で栄養が不充分であるし、放牧中に他人の牛と混ざった場合に自分の牛と思い込んで連れて行ってしまう等のトラブルが絶えないやっかい者と思っている。

彼らは独特の派手な民族衣装を着ていて、ぜひ写真に撮りたいと思っていたが、案内する部落では撮れるというし、ニエリでのキクユ族のショーと違って、現在生活している場所を見学出来るという。予定外のコースなのでガイド料のチップとして、10 ドル渡して、休憩時間を利用して 10 数人で訪れた。

少し離れたところに集落がある。集落といっても、小学校の運動場くらいの敷地に直径 5 メートルくらいの丸いお椀を伏せたような形の土色の家が 40 軒くらいあって、その周囲をトゲが鋭い細い枝を積んで、囲いにしているだけである。周囲に野生動物がうようよ居る草原で、これで安全なのかと心配するくらい、簡素な作りの村である。

（写真 81）マサイの男達。男は放牧時に使う手作りの杖を必ず持っている。男達の後ろに家がある。

車から降りると、4、50 人の男女が出迎えに村から出てくる。それぞれ、原色の民族衣装を着ている。男性陣はすらりと背が高く、我々より頭一つ高い。女性達もすらりとしていて身長は我々と同じくらいであった。その中の代表者なのだろう背が中でも高い男が二人近づいてくる。そして、歓迎の挨拶と案内があるがきれいなキングスイングリッシュであった。

ガイドのダンカンの話だと、遊牧生活をしていて住居が固定していないマサイ族は教育されていなかったが、政府の指導で村から１人か２人を必ず学校に通わせる規則になっているとのことである。ケニアの学校では英語を教えている。この２人が英語を話すのはそのためであった。

（写真 82）マサイの女性。カラフルな衣装を着ている。左端の杖を持っているのは男。

（写真 83 右）我々の案内してくれた、英語を話すリーダー格の男。精悍な感じの良い男ぶりだ。

彼らの説明では、村の名前は聞き漏らしてわからないが、
この村では 2 家族で 230 名が暮らしているとのことだ。家族といっても兄弟何世代も一緒に同じところで暮らしているから、親族含めての大人数になる。二つの異なった家族集団が居ると考えた方が正解だろう。もちろん、一夫多妻である。幼児や子供の死亡率が高く、労働集約型であるから、子供をたくさん生まないと一族の発展はない。

（写真 84,85,86）赤ん坊を負ぶった母親を見つけて写真を撮っていたら。「これは俺の息子だ」と父親が来て一緒に撮る。自慢の息子みたいだ。それにしても貫禄のある赤ちゃんでｓる。

牛の牧畜を生業としていて、周囲に牧草がなくなると、村をたたんで他所に移動する

遊牧生活である。どの位で移動しているのかは聞きそびれてしまったので、わからない。

村に入る前に歓迎の踊りがあり、その後悪霊祓いの踊りがある。
男は掛け声をかけながら上体を前後に揺らすだけで、女は両手を脇に下ろした、気お付けの姿勢で、上下に飛ぶだけの単純なものである。
歓迎と悪霊払いで踊りは違わない。おそらく言葉がわかれば、掛け声が違っていると思うが、それは種族の違うダンカンにもわからない。

（写真 87 左）男達の踊り。体を前後に揺らすだけの簡単なものだ。或いは悪霊を大勢で脅しているのかもしれない。そんな雰囲気である。

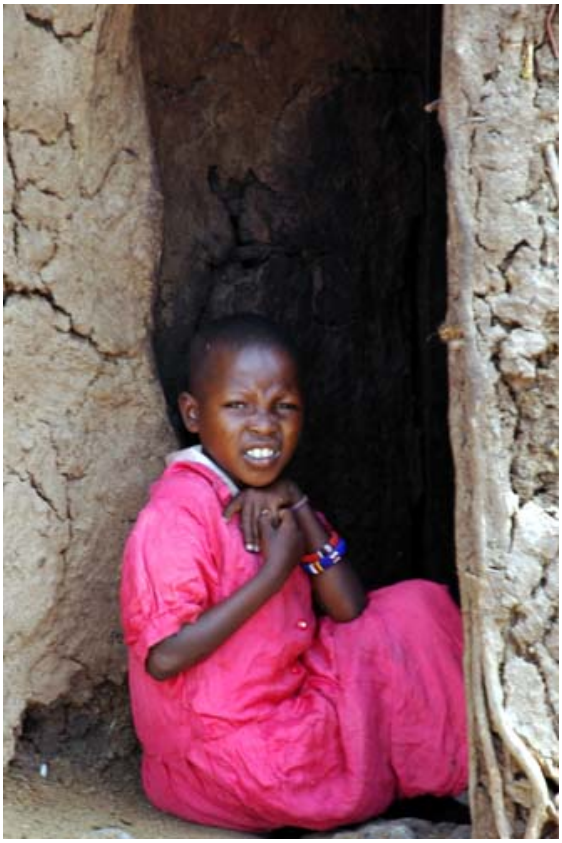
（写真 88 右）若い女性たちの歓迎の踊り。
体を上下に揺らす簡単な踊りである。

ひとしきり踊りがあって、ようやく入村となる。村の状況を見てまわると、敷地は円形で小学校の運動場くらいの広さで簡単に一回りできる。円形の敷地に沿って、太く鋭く尖ったトゲのある小枝が高さ 1 メートル半で周囲に巡らしている。入り口は 2 箇所あるが狭い。おそらく夜は同じトゲの枝で閉じるのだろう。このサバンナにこのトゲを持った植物は至る所にある。動物に食べられることがないからである。

（写真 89）マサイの家並みと部落を囲むとげのある小木の垣根。

野生動物は危機意識を本能的にもっている。トゲが刺さって傷を受ければ、感染症にもなりかねない。近づくこともしないので、この程度の囲いで村は安全なのだ。

囲いの内側に直径 5 メートルくらいのお椀を伏せたような形の家が、ほぼ等間隔に 40 軒ほど円状に並んでいた。家は壁も、屋根も牛糞まじりの土を塗りつけて出来ている。芯になにを使っているかは確かめていないが、おそらく木の枝を組み合わせているだけだろう。窓はついていない。入り口も小さい。小学生が入れるくらいで、我々が入るときには腰をかなり折らないと入れない。



（写真 90,91）家の入り口。狭くて小さい。おそらく、通常は屋外に居て、就寝のときにだけ家に入るのだろう。独特の臭気でとても我々は長くいられない。
　少女が一人、入り口でこちらを伺っていた。恥ずかしがって出てこない。

　中に入ると真っ暗でなにも見えない。入り口が真っ直ぐついていない。入って一度 U 字に曲がらないと部屋にいかないので、入り口の明かりも殆ど入らない。もちろん一部屋で円形の場所に皆がごろ寝をするだけの家というより部屋と呼んだほうが良いかもしれない。牛糞で出来ているので、乾燥しているといっても、中は異様な臭いに包まれている。とても我々には中に 1 分もいられない。

　家の高さは低い、2 メートルもないくらいである。天井が頭のすぐ上にある。
家を作るのは女の仕事なので、そのために高さが低いのだと説明される。
　敷地の中の丸い広場は放牧した牛が帰って来たときの居場所だろう。牛の糞が足の置き場もないくらい、盛り上がり散らばっている。村全体にアンモニア臭がただよっている。牛糞は彼らにとって、生活上の必需品である。乾燥して家の壁にひびが入ると、新しい牛糞を塗りつけていくのに使用するし、乾燥したものは燃料として使っている。

（写真 92）火起し。電気もないしマッチや灯油もない。彼らはこうやって火を着けて拾った枯れ木の焚き火だけで生活している。

　火起こしの実演をしてもらう。柔らかそうな木の板に木の棒を錐揉みしていって、
乾燥した牛糞をほぐしたもの（もぐさみたいになっている）を寄せて火をつける。

私もためしてみたが、結構体力がいるが、板が焦げてきたときのタイミングさえうまく掴めば案外かんたんに火がついた。
　生まれて間もない子牛は放牧に出していないらしく、われわれが訪れた日中に牛は居なかった。わずかに数頭の子牛が一箇所の囲いに入っていただけであった。

　ここでの生活では女性は外には出ない。子育てをするか、せいぜい周囲でかれた枝を炊事のために拾ってくるだけである。男はもっぱら村の外で一日中牛の放牧をする。服装は一枚の布をまず腰に巻いて、それを肩から上半身にかけているだけである。中には残りを上半身にまいている人もいる。飾り物は好きらしく、腕輪や首輪など、結構じゃらじゃらと付けている。

　必ず持っているのは木の杖である。これはけっして手放すことをしない。
使い道は牛の放牧時に牛を追う時、他の動物を威嚇するのに使っているし、休むときはその杖に体重をのせて休稽をとっている。部落の外で腰をかけるということをしないという。おそらくはサバンナには毒虫が潜んでいるし、放牧している牛を監視しているからだろう。杖はそれぞれが、自分にあった太さや長さの杖を持参している。飾りを着けたり、一本として同じ作りのものはない。自分の好みのスタイルを自作しているのだ。それに、おそらく、ふところにゴムパチンコをしのばせている筈だがここでは見られなかった。

（写真 93）杖を作っていた。時間があるとサバンナで拾ってきた木片で杖を作っている。一人で数本持っている。頼めば気軽に物々交換してくれる。

　この村では自由に写真が撮れた。マサイの人と一緒に並んで頼んで写してもらうという、どこの観光地でもある光景があちこちで行われた。
彼らは結構観光なれしていて、人懐っこい。顔を合わせると必ず、「What Your Name？」と聞いて来る。
　こちらが名乗ると、「自分はウイリアム」「自分はジョージ」「自分はダンカン」と誇らしげに名乗ってくる。それがいずれも英国風の名前をしているのが面白い。植民地時代の名残なのだろう。
　それ以外に会話が続くことはないので、何度でも名前の交換をしては、にっこりとうなずきあう。それだけしかないがそれで結構親近感がでるから面白いものである。

　女性は踊りのような必要な場面では出てくるが、それが終わるとさっさとひっこんでしまう。赤ん坊を背におぶった母親だけが私の被写体になってくれた。女性達の衣装はビーズの刺繍があって、色彩といい飾りといいかなり派手である。
　村には子供も一杯いたが、男の子はみなが集まって、珍しそうにこちらを見ているだけで、中には家の戸口で隠れながら見ている子もいた。服装は普通で半ズボンに Tシャツか女の子はワンピースである。持参したキャンデーを出しても、近くの大人を

見て、いいよとうなずくまで、手をだすことはしない。

（写真 94,95）マサイの子供たち。見慣れない観光客に一角に集まっていた。

マサイ族といえば、高とびが高く出来ないと嫁を貰えないと聞いている。どうなのか聞いてみたら、実演をしてみせてくれた。女性陣と男性陣が向き合って 5 メートルくらい離れて横並びにならんで踊る。相変わらず男は上体前後運動、女は垂直とびである。どうやらそれは見合いの踊りらしく、時々１人が出てきて高く垂直とびをする。１人が終わると別な人間が出てきてまた飛び上がる。結構高くとぶが、中にはバランスをくずしてして、ぶざまな姿をさらして野次られるのもいた。

マサイ族の人達は今では都会にも住んでいるし、くる途中の商店街でも歩いているのを数多く見ている。おそらくは、昔ながらの遊牧生活している人達は少なくなっているだろうし、国としても定住政策をとっているはずである。

そのうちに、こういう村はなくなるだろうと思いながら、送迎の踊りで送られて村を出た。ホテルに帰る車で、それまでは大地と一体化していたので、わからなかったが、キリマンジェロの麓の草原のあちらこちらに同じような村を幾つも見た。

(写真 96 左)我々を見送って部落内に帰るマサイの人々。周囲の景色に同化しているので、近くにこないと部落と解らない。右奥に雲がかぶったキリマンジャロがある。

（写真 97 右）マサイの男達に囲まれて、短い杖を貸してもらって握っている。